

私と日本学術会議

高橋 清久

私は 18 期、19 期の日本学術会議の会員です。当時は今と違って関連学会の選挙で会員が選ばれ、自動的に関連学会の研究連絡会の委員長になっていました。私は精神神経学会を始め、20 余りの精神医学関連学会の推挙で学術会員となりました。私の前任者である島園安雄先生（13、14、15 期）、大熊輝雄先生（16、17 期）はいずれも国立精神・神経センター（現：国立精神・神経医療研究センター）の総長であり、島園先生は初代総長、大熊先生は第三代総長、私は第五代総長であり、総長が学術会議会員となる習わしがあったようです。

関連学会の選挙で選ばれるとのことから、投票権を持つ学会をメンバーとする研究連絡会という会が組織されており、それぞれ活発な活動を行っていました。その活動結果は報告あるいは提言と言う形でまとめられ、学術会議の審査をパスすると公表されていました。そんなわけで、私は精神医学研究連絡委員会の委員長になり、研究連絡会の活動をまとめていく立場になり、定期的に連絡会議を開きましたが、関連分野との交流ができ、各関連学会の動きを知ることができて、大変視野が広まったという思いがありました。

私の 2 期 6 年の任期中に、私がメンバーとして関わった学術会議報告書が三つあります。これらは私の学術会議会員時代の思い出深いものであると同時に、私の長い精神医学者人生のなかでも主要な活動の一つでもありました。

最初のもは「法と精神医学」と言うテーマで時の法務大臣からの諮問されたものでした。当時、国は重大犯罪を犯した精神障害者をどのように処遇するかを検討していました。この問題に関しては法務省では第二次世界大戦がはじまる前から議論していましたし、厚生省も 20 年以上も前から暴力的な処遇困難患者の処遇という課題に取り組んでいたという経緯がありました。平成 13 年に精神保健福祉法が改正された時の付帯決議に触法患者の処遇について早期にまとめること、という文言が入れられ、これを受けて法務省と厚労省が同じテーブルで話し合いを始めていました。しかし、患者の人権に関わる問題なので、なかなか議論はまとまりませんでした。そんな時に池田小学校事件が起きましたが、それは精神病院入院の前歴を持つ男性が小学生数名を刺殺するといういたましいものでした。それをきっかけに、時の小泉首相が法律をはやくまとめるようにという指示をだし、法律の素案が示されました。これには賛否両論があり、精神障害者や弁護士会、精神医療関係者から激しい抗議も出されていました。そんな時期における法務大臣からの諮問でした。法律関係の二人の委員を中心に検討会が組織され、何人もの学識経験者の意見を聞いて最終的には、社会復帰を視野に入れた法制化は望ましいものという結論をだし、報告書をまとめました。この委員会で多くの法律関係の方々の知己を得たことが私にとっては最大の収穫でした。

この長く続いた議論は最終的には、略称「医療観察法」という法律の誕生となり結論を得ました。この法律が施行されて丁度 10 年となりますが、私が国立精神・神経医療研究センター総長を退官した後に就任した公益財団法人 精神神経科学振興財団が、この法律の医療に従事する人々のための研修を厚労省から委託され、現在も年に 3 回の研修会を開催しており、そのたびに学術会議で議論した当手を思い出しています。

第二の報告書は「睡眠学の提唱」です。これは精神医学研連の話し合いの中で、睡眠研究の重要

性が認識されずに、文部科学省研究費の研究細目にも入っていないということから提案され、心理学、生理学、薬学等の研究連絡会と共同で報告書をまとめました。これは主に精神医学関係者で睡眠研究を行っている者が中心となってまとめられましたが、睡眠学という言葉が新鮮な印象を与えたようで、第七部の中でも、また審査委員会でも好評を得ました。その中で、疫学調査や知識の普及・啓発に関連する領域に睡眠社会学という新造語をあてましたが、これも睡眠研究者の間で評判となり、現在は、睡眠学は睡眠の基礎研究を行う睡眠科学、臨床研究を行う睡眠医歯薬学、それに睡眠社会学が加わった三分野からなるものとして、受け入れられています。この報告書が完成したお蔭で3年間の期限付きでしたが、文部科学省の科学研究費の細目に睡眠学が採用され、睡眠学研究が活発化するきっかけとなったことも嬉しく思い出されます。

第三の報告書は精神医学研連のみの活動でしたが、精神障害者に対する誤解や偏見の実情を明らかにし、それにいかに対処すべきか、というテーマでした。2年間に20回以上関係者を招いて議論を重ね、最終的に「心のバリアフリーを目指して」という報告書にまとめました。議論の過程で障害者本人や家族も招き、さらに法律家や支援者の意見も聞いて当時としては斬新的な報告書が出来たと自負しています。2013年に私はアンチステイグマの国際会議を東京で主催することになりましたが、この時の経験が大いに役に立ちました。

私にとって6年間の学術会議の活動はきわめて印象深いものでした。自分の人生の中でも特筆されるもののひとつです。第七部のメンバーとして、医歯薬関係者の多くの方々とお付き合いが出来、自分の世界が大きく広がった時期でもありました。後半は第七部の副部長として部長の鴨下先生をお助けする立場にありましたが、その職責が十分に果たせず、今は亡き鴨下先生に申し訳なかったと後悔しているところです。この一点だけに悔いが残る私の学術会議人生です。

●プロフィール

高橋 清久

日本学術会議第19期第七部副部長

日本学術会議第18・19期第七部会員

公益財団法人精神・神経科学振興財団理事長

国立精神・神経医療研究センター名誉総長

藍野大学名誉学長